

乙訓文化

87号

2016年8月31日

発行：乙訓の文化遺産を守る会

目次

五〇周年記念講演会の報告

「長岡宮跡牛車わだち跡模型について」

阪急「長岡宮前」「西国街道口」の駅名に

【本の紹介】

仁木宏 『歴史家の案内する京都』

山崎達雄 『ごみとトイレの近代誌』

杉村卓二 『寺子屋くずし字入門』

五〇周年記念講演会

の開催をおえて

乙訓の文化遺産を守る会は一九六六年（昭和四一年）の二月に向日神社を会場にして創立されました。そして今年六月十八日（土）緑ふかまる同じ向日神社を会場にして、五十周年の記念講演会を開催しました。会員をはじめ古代史に興味をお持ちの方々と、会場は満員の盛況となりました。井上満郎先生に「古代乙訓と環日本海文化圏―東アジアのなかの弟国宮・長岡京」と題して記念講演をおこなっていただきました。そのあと、「乙訓地域の文化の創造をめざして」とのテーマで、元会長の高

橋昌明先生や中山修一先生の長男忠彦さんをはじめ、当日参加の皆さんがたから様々なご意見・感想をいただきました。（井上先生の講演については、会誌『乙訓文化遺産』の特集号に掲載します）。講演と交流会のあとは、和やかな懇親会をもつことができました。

交流会でいただいた感想の一部を紹介します。

【感想】

・乙文創立五〇周年事業の実施まことにおめでとうございます。会員の一人として今日の講演会に出席させていただきました。すでに約四〇年前になりますが、私は長岡京発掘調査に参加させていただき、中山修一先生、都出比呂志先生、高橋美久二先生、そして調査にかかわっていらつしやった方々に大変お世話になりました。現

在は栃木県宇都宮市の中世平山城芳賀氏の
とびやま
「飛山歴史体験館」に勤務しています。（上野とも子）

・古代の日本の歴史の話は歴史好きな人でなくても心を揺らされます。歴史とは仕方がないが、天皇家及びそれに近い人びとの歴史であり、勝者の歴史だが、「乙訓」に関することになると、隙間から一般市民というか、色々と土くさい話も出て来て、さまざまなことが想像できて楽しい。最近読んだ本などで、王族・豪族でない人々も思ったより豊かな楽しい生活が出来ていたようで、ほっとした気分になった。私の教わった歴史とは少し変わってきて、これも熱心な歴史研究家のお陰です。有り難うございます。（高井茂）

・乙訓がどういう風にして東アジアとつながっていたのか、不思議に思っただけで参加しました。長岡が歴史的にも古い時代からそれなりの地域であったことを知り、視野が広がった感じがします。五〇周年の立派な歴史を拝聴して、それぞれの地域で一人ひとりが開発ブームの波に立ち向かって大変な努力を続けられたことが、今につながっていると感銘を受けました。今日はとてもよい会でした。

・昭和二九年の夏休み私は西京高校三年生でした。歴史に関心ある生徒一〇数人が西向日町駅で下車しました。集合場所に京大生がリヤカーの上にバケツやスコップやその他七つ道具を積んでくれました。中山先生の指示で、朝堂院の礎石になるものを発掘すべくがんばりました。その後、今日まで歴史に関心があり現在に至っています。(奥田義雄)

・小生は耳が聞こえないのですが、乙訓の大切なふるさとを守るために運動をすすめたいと思います。西向日あたりのすばらしい風景のなかに、マンションを建てることはアカン。我が家の近くにある寿岳先生の家も大切ですよ！(狩野直禪)



多くの感想をいただいた交流会の様子

「長岡宮跡牛車わだち跡模型」 の展示公開をお願いをしました

守る会の五〇周年記念講演会でご講演いただいた井上先生から、西川幸治先生の提案を、当会の事務局に届けていただきました。守る会が発足した五〇年前、当時長岡京の発掘調査のご指導をいただいた西川先生から、当時の調査を記念するメモリアムとして、「長岡宮跡牛車わだち跡模型」を、現地で展示・公開できないものだろうかとのご意見をいただきました。

わだち(轍)模型は、長岡宮大極殿造営の際の牛車、人、牛の通った跡で、宮殿の造営工事の様子を知る貴重な資料です。一九六五年三月に行われた京都府教育委員会の長岡京の発掘調査(調査員:福山敏男、中山修一、西川幸治各先生)の際、長岡宮朝堂院西第二堂の建物根石の下層から牛車のわだち跡が発見されました。当時、わだち跡の発見は大変珍しく、実物模型が製作(製作者:小橋敏夫さん)され、実物大模型として保存されることになりました。その後この模型は、京都府立山城郷土資料館に收藏され現在にいたっています。

発掘担当者の一人であった西川先生からの「資料館の倉庫に眠っている模型を何とか目の目を見るようにしてほしい。展示・公開等について関係機関に働きかけてくれないか」とのご意見をうけ、守る会としてまず模型の現状把握をおこない、その上で向日市などの関係機関に働きかけ、展示・公開の実現を図っていくことにしました。七月に山城郷土資料館を訪問し模型の保存状況を見学しました。模型は長さ648cm、幅308cm、高さ66cmで、六個に分割され收藏されてきました。以前向日市文化資料館で展示されたこともありますが、巨大なもので展示するに当たっては相当なスペースが必要になります。

向日市は歴まち認定を受け、「長岡宮のあるまち」として広報を強化していますが、このわだち模型の展示・公開もその一助となるものと考え、先日向日市長と教育長に要望書を提出しました。また会として今年度総会の講演テーマとして『長岡京跡のわだち』と題し西川先生にお話いただきます。

【参考資料】

西川幸治「長岡京跡発掘調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』1966)

【わたしの提案】

長谷川 澄夫

阪急の駅名変更

「長岡宮前（西向日）」と 「西国街道口（東向日）」に

一昨年度、向日市は「歴史まちづくり」に認定され、「プレミアム商品券」の発売や「むこうむこう」ポスターの作成など、さまざまな取組みが行なわれている。昨年守る会が向日市の出前講座の一環として取組んだ「歴まち」の学習会（第五七回歴史文化教室）の折に、小生は左記の発言をおこなった（会誌「乙訓文化」八五号）。

阪急電車に協力をもとめ、「西向日」駅を「長岡宮前（西向日）」、「東向日」駅を「西国街道口（東向日）」と駅名を変更すると共に、駅舎や駅前の整備を協力してはどうだろうか。「何々前」や「何々口」と云う地名や駅名は多くあり、来訪者にとっても解りやすい名前であろう。朝堂院公園と併せ、ホームなども朱色のアーチとするだけで「宮」のイメージがわくだろう。西国街道の通

る町のなかで、街道の横に駅舎があるのは向日町だけであろうし、「歴史街道」も意味を持つことになるだろう。

行政に提言するやり方もわからず日を経たが、このプランに興味をもった知人から、もう少し意見を深めてまとめてみたらと次のアドバイスをいただいた。

長岡京ってなに？

新聞報道などをみても向日市の「歴まち」の進捗の様子は分かりづらく、また、六月の京都新聞の洛西版では、向日市に長岡京があったと答えられる人は五割とか。「向日市に長岡京があった」との認知ははかばかしくないようである。だからといって観光客を誘致するために「遺構の復元」となると、膨大な費用もかかり、その費用対効果も不安である。個人的な思いつきではあるが、「長岡京」「長岡宮」のなまえをより広く全国の人びとに知ってもらう手立てはないものかと考えてみたが、その一つとして、阪急「西向日」駅の駅名の改称は有効と考える。

「長岡京」の駅名はひとあし早くJRの駅名となってしまう。昭和六年の開業以来「神足」の駅名は、歴史的な由緒もあるものの難読地名の

ひとつでもあった。昭和四七年の市制によって「長岡町」が「長岡京市」となったが、平成七年にはJRの駅名は「長岡京」駅と改称された。他の地域から訪れた人のなかには、長岡京市に長岡京の都の中心があったと思う人もあると聞く。また、向日市のなかには「長岡に都の名まえを窃まれた」と嘆く人もあるとか。お隣の町同志が町の名まえで揉めるとは困ったものである。確かに長岡京の中心の宮殿の遺構は向日市に残されている。と同時に、右京・左京の都の遺跡の多くは長岡京市域に残されているから間違いないわけでもない。

阪急「長岡宮前（西向日）」駅は？

そこで、阪急電鉄の理解を得て、「西向日」の駅名を「長岡宮前」としていただくことはできないものだろうかと考えてみた。「西向日町」駅は昭和三年に開業され、駅の東側一体は新しい住宅地が開発された。昭和四七年の向日市の市制にもなつて「西向日」と変更された。この駅を降りた西北一帯は昔は竹やぶや畑であったが、住宅が立ち並ぶ「阪急住宅」の住宅街となった。とともに、開発にともなう発掘が行われた結果、大極殿や朝堂院の宮殿の遺跡が広がる一帯でもあった。

駅前には、昭和二十九年に中山修一先生が長岡宮の遺跡を最初に発見された「会昌門」の遺構の碑が建てられ、一帯は「朝堂院公園」として整備されている。

かつて小中学校の歴史の教科書には「長岡京」の記載がなかったが、「長岡京の名まえを子どもたちの教科書にのせて」と、中山先生や両市の市長が中央の官庁に陳情された歴史もある。以来、宮殿の宮跡、都の暮らしの京城の発掘もすすめられてきたが、「長岡京時代」の研究は緒にいたばかりである。この時代が古代史の研究にとっても大変重要な十年といわれることもある。このような貴重な遺跡の所在を全国の多くの人びとに知ってもらうために、遺跡公園やパンフレットなどによる宣伝・啓発のみでなく、誰もが訪れることのできる、旅の目安として、阪急電鉄に理解と協力をお願いして、「西向日」の駅名を「長岡宮前」としてはどうであろうか。広大な平城宮遺跡は近鉄「西大寺」駅前であり、飛鳥には「橿原神宮前」と、歴史的名辞が冠されている。「西向日」は八十年の歴史のある駅名であるから、「長岡宮前（西向日）」としても良いだろう。駅のホームの鉄柱を、宮殿の柱のように朱色のカラー塗装にするだけで、遠来の遺跡ツアーの人びとに感銘を与えること必定であろう。駅名の変更には様々な手続きや出費もあると思うが、旅客が増えれば阪急電鉄にも一考

していただけるのではないだろうか。

阪急「西国街道口（東向日）」駅は？

これを機会に「東向日」の駅名についても一考してはいかがと思う。「東向日町」駅は戦前・戦後と地域の農家の人びとや生徒が乗る人影まばらなローカルな停車場であった。向日町競輪場ができると開催日は大勢のお客で賑わう駅となった。昭和四十年ごろから人口の増加にともなって、東向日町界隈はすっかり繁華となり、朝夕は通勤・通学の旅客でごったがえすところとなった。もともと明治九年に開業したJR「向日町」駅は、「京都」駅よりも半年前に開業した由緒のある駅で、乙訓一円の物資輸送や乙訓の光明寺や柳谷観音などの寺社めぐり、また兵隊の見送りで賑わい、駅の周辺には大きな工場もあった。そしてなによりも「向日町」や「東向日」の駅は、西国街道の沿道にある駅である。

最近、「東向日」駅付近にある「築櫛講」と刻まれた大きい燈籠が交差点の角に移された。この燈籠は伊勢参りを終えた地域の人たちを出迎える「坂むかえ」のシンボルでもあった。このほど「西国街道」の石標も建てられたが、この大燈籠を野辺坂から向日町へと辿る道が西国街道で、

「山崎街道」や「唐街道」ともよばれ、京都の東寺から西宮へとつづく歴史の道であった。山崎・芥川（高槻）・郡山（茨木）・瀬川（箕面）・昆陽（伊丹）と続くこの街道筋は、阪急京都線および神戸線とほぼ並行している。阪急の他の駅舎は、旧街道筋や宿場の近くにはあるものの、街道の真近くに位置する駅は「東向日」をおいてない。

最近の東向日界隈は、今まであったスーパーがなくなり、新しくマンションができ、市役所の別館もできるとか。歴史的な由緒をこめて、新しい町づくりを目指すにも、「西国街道口（東向日）」という駅名も役立つのではないだろうか。



上；阪急東向日駅 下；阪急西向日駅

【本の紹介】

仁木宏・山田邦和編著

『歴史家の案内する京都』

（文理閣 二〇一六年五月 刊行）

本書は、都市史を専門とする二人の研究者によって編まれた史跡案内の書である。単なる史跡のガイドブックの類であれば書店で多く見かけるが、歴史学の最新の研究成果を十分に反映させ、かつ親しみやすく実用的な本となると、なかなか見当たらないのではないだろうか。

本書は、編著の二人をはじめ、はしがきにもあるように「愛情をもって町を紹介できる」「個性的な」歴史家が執筆している。いずれも実績ある優れた研究者であるとともに、机上の研究だけでなく実地での案内経験が豊富なフィールドワーカーであり、その経験に裏打ちされた案内文は、臨場感にあふれている。

また、取り上げられたテーマとその内容も執筆者の個性を反映しており、一般的な史跡ガイドブックとは一線を画している。例えば「検非違使の活躍」という観点からの史跡案内は斬新であるし、京都を代表する観光地である嵯峨・嵐山が中世には都に準ず

る「都市」として認識されていたと述べる「中世都市嵯峨」も興味深い。「山科本願寺・寺内町」では、外敵に備えた山科本願寺の巨大な土塁・堀跡を紹介している。「洛東の山城遺構」では、雅のイメージが先行する京都も実際には血なまぐさい戦乱を幾度も経験し、多くの武将たちが周辺の山野に数々の山城を築いて入洛をうかがっていたことを述べた上で、それらの山城跡は忘れ去られていると指摘し、縄張り図付きで紹介している。その他のテーマも興味深いものばかりであり、執筆陣の歴史への愛情が感じられる。

案内文は全二十七本である。タイトルを見るだけでも興味をそえられるものも多いと思われるので、以下に紹介する。

【平安遷都以前】

1 太秦・嵯峨野の古墳群／2 長岡京

【平安・院政・鎌倉時代】

3 平安京／4 京都周辺の山林寺院／

5 検非違使の活躍／6 鳥羽殿／

7 白河／8 別業都市宇治／9 法住寺殿／

10 六波羅／11 西八条・七条口／

12 清水坂と鳥部野

【室町・戦国時代】

13 中世都市嵯峨／

14 『洛中洛外図屏風』の上京／

15 戦国時代の下京／16 祇園祭

17 山科本願寺・寺内町／18 洛東の山城遺構
19 大山崎／20 石清水八幡宮と八幡

【近世・近代】

21 聚楽第／22 御土居堀／23 大仏と豊国社

24 伏見城／25 二条城／26 京都御所

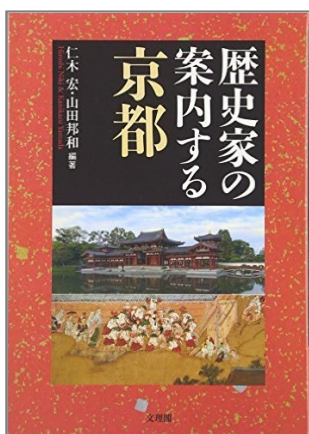
27 近代における豊臣秀吉の顕彰地

本書では、写真や図版を豊富に掲載するとともに、本文に対応する形で付番された史跡のポイントを現代の地図に落とし込んであり、本書を手にして実際に歩くことができるようになっている。

また、学問的に正確でありながら、決して難解でなく、誰もが気軽に読める案内書である。

編著者の意図は、十分に達せられているといえるだろう。是非ご一読をお勧めする。

（里見徳太郎）



山崎達雄著

『ぐみとトイレの近代誌』

(彩流社 二〇一六年七月 刊行)

人も動物である以上、排せつという現象は、原人であつた時代から将来にわたつて、未来永劫避けることはできません。また人間が道具を使うことを覚え、加工する技術を習得し、生活を豊かにしようとする限り、そこから発生する廃棄物も、無くすことはできないでしょう。

我々にとつてこの切り離すことのできない事柄を、ユニークな面からスポットをあて、科学として読み解き、楽しませてくれるのが本書です。

著者の山崎達雄氏は「乙訓文化遺産を守る会」の古くからの会員で、現在も古文書部会のベテランとして活躍されています。本の著者紹介の欄にもあるように「異色の元行政マン」のキャッチフレーズのとおり、大学卒業後、行政畑一筋に歩んでこられた人で、関係者によると大変な愛妻家であられるようです。

さてこの本のタイトルが、近代史ではなくて近代誌というところにその特徴があると思われます。近代誌とあるように、本の内容が絵葉書及び新聞広告、そして収集されたユニークな遺物から読み解くとい

う筆者ならではの切口で、ある意味、風俗史(誌)の読み物として楽しむ書であると同時に、科学専門誌として貴重な研究書でもあると思います。江戸・明治・大正・昭和と我国の近代のぐみ・トイレ事情の事実を、多くの資料から緻密な分析で紹介し、解き明かされています。

著者は「誌」に拘つておられるようですが、この本は、立派な「史」でもあり「誌」でもあるとも思っています。本の内容を紹介してみましよう。

A4版・本文二三〇頁

第I部「ぐみの近代誌」

第II部「トイレの近代誌」の構成になっています。

この本を手にとつてまず驚くのは、本のカバー迄もびつしりと掲載されている図版や写真です。勿論本文の随所にも同様に掲載されています。

著者が長年にわたつて収集された絵葉書や新聞広告、そして行政資料からの転載ですが、昔からこんなにも、ぐみやトイレ関係の画・絵葉書・広告があったことを知り、驚くと同時に笑わされます。

中でも明治の鬼才宮武外骨の滑稽新聞増刊号「絵葉書世界」のトイレに関する絵葉書の紹介は、傑作揃いでこれだけでも必見の価値があると思います。

第I部の「ぐみの近代誌」では、塵芥焼却について絵葉書や各地の膨大な行政資料からの調査記述で

あり、かなり専門的ですが、我々が住む京都のことも多く調べておられ、知らないことだらけでした。公的施設である焼却場の絵葉書がこれほど各地で発行されていたのにも驚かされます。

第II部の「トイレの近代誌」では、便器の移り変わり、有料トイレの歴史、立小便の取り締まりや排せつ時のスタイル、さらにトイレット・ペーパーの変遷まで、愉快な図版入りで楽しく教えてもらえます。

本文の「はじめ」の項に、仏文学者で京都学派の桑原武夫氏の問いかけ「日本の近代化の一指標にトイレ張のトイレによる水洗化がある。調査が必要」に、著者は絵葉書や、新聞広告などを考察し、調査研究し、一定の成果を出したように思います。

太古から、江戸時代まで日本は完全なリサイクル社会でした。とことん使いきつた後の僅かな物だけが廃棄物でした。し尿も大切な肥やしです。これは戦前までもほぼ同様の社会でした。しかし化学物質の発明は、リサイクルするのが大変な時代を招きました。有害な放射能は何千年も残るといわれます。



「かえつて高くつく」、「万一の責任を逃れたい」といった意識も廃棄物を増やし続けています。もったいないの気持ちはあつても、世の中を変えるには程遠いものがあります。本書により読者の意識が、何らかのヒントを得、よりよい社会を作るきっかけになればと思います。(佐藤兼司)

杉村卓二著

『寺子屋くずし字入門』

(創元社 二〇一六年六月 刊行)

書名は『歌でおぼえる寺子屋くずし字入門』『小野篁歌字尽』である。読み書きは手習いの基礎である。江戸時代に寺子屋で用いられた教科書を往来物などというが、『小野篁歌字尽』もその一冊である。くずし字の漢字にふりがながつき、五・七・五・七・七の短歌の数え歌までセットされている。

本書のはじめには「児童教訓いろは歌」が掲載され、五十文字でウォーミングアップができる。

「いにしへの聖の道をならわすバ

とりけだものにおとるなりけり」

というようにつづき、最後の「京」でおわる。

本文の「歌字尽」は、一部八十首の、二部には五一首の歌字尽が収められている。

1 「春つばき」 椿 榎 楸 柊 桐

【歌】春つばき夏ふきのきに秋ひさぎ

冬ふひらぎに 同ハきり

という調子で木偏の字の数え歌となっている。以下、松・柏・松・杣・檜など木偏の文字尽くしがつづき、

18 「すえは上」 末 末 賣 買

【歌】すゑはかみいまだハしたのながきなり

アルハうるなりなきハかふなり

と、日々の書写にふと迷う文字覚えのヒントが書きこまれている。おまけに、子どもだけでなく大人むけにも

55 「男ふたつ」 男 男

【歌】男ふたつなかの女ハなぶるかな

両の女におとこハなり

という具合に、読んでも楽しい本となっている。どの項目にも挿絵と底本の字形が載せられているので、変体かなの勉強に最適である。「変体かな」シートのおまけまで付いているので、古文書学習には最適の本である。本書は「楽しく」古文書を学ぶテキストであるとともに、気の向いた手ごろなページを繰ればよい洒落な読み物でもある。杉村さんはあとがきに「和本は日本の歴史や文化を育んで大切な文化財である」と述べられている。本書にはくどいほどの「るび(ふりがな)」が付されているが、これも近世・近代の庶民の学習の知恵であろう。江戸時代には庶民の身近にあった文化財としての和本を、資料ケースに閉じこめることなく日々の学習や暮らしの学習に活かしていくことができればと思う。(古文書部会 長谷川澄夫)



平成 28 年（2016 年）乙訓の文化遺産を守る会

総会 および 講演会 のご案内

乙訓の文化遺産を守る会は創立 50 年をむかえ、6 月に記念講演会をおこないました。創立のころをふりかえるなかで、50 年前の長岡京の発掘にさいして発見された轍（わだち）の複製模型—都づくりにたずさわった人たちの足あとや荷車の車輪のあとを、ぜひ都のあったこの地で公開しようという声がおこりました。往時の調査・研究の足あとをさぐり、都づくりの歴史をまなぶとともに、貴重な遺物の里帰りをねがう機会にしたいと思います。

と き : 9 月 1 7 日 (土) 13 時 30 分～16 時 30 分

会 場 : 向日市寺戸町公民館（阪急「東向日」駅 西 徒歩 5 分）

講 演 : 長岡京跡の轍（わだち）

「長岡京発掘の思い出」 西川 幸治 先生（京都大学名誉教授）

「長岡京の道路と轍」 木村 泰彦 さん（長岡京市埋文センター）

※ 会員の方は会費（2000 円）の納入をお願いします。会員外のかたは資料代 300 円が必要です

【編集後記】

くる日もくる日も「真夏日」「熱帯夜」、会員の皆様方はお元気でしょうか。軽い「熱中症」のせいにして、総会の案内をお盆前にする予定が月末になってしまいました。

五〇周年記念講演会には多くの方々にご参加いただきありがとうございました。井上先生の講演や交流会の模様については『乙訓文化遺産（特集号）』として発行する予定です。今回は元副会長の仁木先生や、古文書部会の方の新刊紹介号ともなりました。昨年に引きつづき元事務局長の小林清先生旧宅の発掘調査がおこなわれ、大極殿西部回廊の遺構が確認されました。八月の炎天の下、現地説明会がおこなわれました。八月二十八日から京都で「世界考古学会議（WAC）」が開幕されましたが、都出先生が実行委員長として活躍されています。（は）

乙訓文化 八七号

発行日 二〇一六年（平成二八年）八月三十一日

発行所 乙訓の文化遺産を守る会

事務局 長谷川澄夫 方

〒617-0002 京都府向日市寺戸町西野辺 8

☎075-921-2054 / H P (<http://otubun.org>)

振替番号 009908130084

年間会費 二〇〇〇円